
星降る町の彼女

水科代利

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星降る町の彼女

【Nコード】

N4293BA

【作者名】

水科代利

【あらすじ】

仲良し三人娘の千世・乃衣・桜香。

桜香の様子が最近変だけど……？

完全にオリジナルの長編です。
女子高生の友情がテーマです。
が、ちよつと違う気も…。

登場人物（前書き）

一応 主要メンバーの紹介を…。

登場人物

杉本千世

（すぎもと・ちせ）

星空高等学校に通う美少女。

すらりとした長身と愛らしい垂れ目が特徴。
決断力があってストイックな一面も。

一瀬乃衣

（いちのせ・のい）

千世の友達。

顔は地味だけど、勉強も運動もできて優しい女の子。
いつも冷静。

千世に器用貧乏と称される。

木梨桜香

（きなし・おうか）

千世の友達。

背は低いが顔は美人。

人見知りのくせにサディスティックなところがある。

星香

（せいか）

星空町に伝わる星姫伝説の主人公。

・*
。

「さよなら」といった彼女の声は、今も私の中で反響するんだ。
黒くて大きな瞳も。

真っ白な肌も。

私の中に消えずに焼き付いている。

ねえ、桜香。

どこへ行ってしまったの？

・*
。
・*
。
・*
。
・*
。
・*
。
・*
。

文字数が足りないようで投稿できないらしく（笑）
ここで後書きも書いてしまいますね。

このお話は私のよく書くタイプのものです。

星だの伝説だのいつていますが、基本的には女子高生の日常です。
いかに主人公たちがかわいく見えるかを研究しました（笑）

↑

お話は基本、千世ちゃん目線で進みます。

のんびり更新かと思われませんが、完結はしています。
ちよいと暗い部分もありますが、ハッピーエンドです。

よろしければ感想お待ちします♪

序章 星姫伝説

星空町がまだ小さな村だった頃、白い外壁の屋敷に星香という妖術使いの少女が一人、暮らしていた。

星香は体が弱く、屋敷の外へ出ることはなかった。

しかし、彼女の妖術の腕はかなりのもので、村人たちは尊敬の念をこめて、星香のことを星姫と呼んだ。

星香は体の調子がいい日は、屋敷を訪ねてきた村人の願いを叶えた。彼女は自分の村を愛していた。

ある時、村に飢饉が起こる。

空が真つ赤に燃えたかと思うと、村の水は枯れ、植物は朽ち果てた。飢餓に苦しむ村人たち。

そんな村を屋敷の窓から見ている星香。

星香は自分の体がもう長くはもたないことを知っていた。

そして、自らの命と引き替えに村を救う妖術をかけた。

白い光に包まれる村。

草木が息を吹き返し、小川のせせらぎが聞こえ出した頃、村人の一人が白い外壁の屋敷を訪ねると、木の椅子に座り、眠るようにして息を引き取った星香がいた。

星香の墓は村の小高い丘に作られた。

それ以来、彼女の魂は自分の命日になると、星となって、屋敷のあった場所へ帰ってくるという。

第一章 星の少女

「今年の星祭りは浴衣で行く？」

桜香が訊ねてきた。

「うーん……。うち、浴衣、持ってないし」

私は答えた。

「うち、あるけど、出すのやだ」

乃衣ちゃんも答えた。

桜香が怒る。

「信じられないわ。女子高生が浴衣、着ないのっ？でも、一人だけ浴衣嫌だから、ワンピースにする」

「いいじゃん、桜香。桜香だけ浴衣でも。一番、似合うでしょ？」

私がいようと、桜香は睨んできた。そういう問題じゃないの、とでもいいたいようだ。

私たちが住む星空町では、古くから伝わる星姫伝説にちなんで、星姫の命日である八月二十五日に星祭りというお祭りが開かれる。

星空町は神奈川にある小さな町で、可もなく不可もない場所。

星祭りは、近くの町も参加する、この町では珍しく派手な行事。

星空町に暮らす子供は、毎年、必ず行くものだ。私も小さな頃から行っている。

私の名前は杉本千世。

星空高等学校二年二組二十二番。

小学校は第一小学校で、中学から星空高等学校と隣接している中学へ。

好きな科目は世界史。以上っ。

髪は脱色してパーマをかけている。目は垂れ目。背と鼻は高め。

一緒にいるのは一瀬乃衣と木梨桜香。

乃衣ちゃんは何でもできて、いわゆる器用ビンボーってやつ。数ヶ月前に髪を茶色にしたせいか、なんか薄い。薄いけど、優しくてみんな大好き人気者。星高のマスコットだ。ちなみにクラスは二年四組。

桜香は、なぜか基本呼び捨てで呼ばれている。根っからの文学少女で、日の光が嫌いで、髪の毛は黒いストレート。目は乃衣ちゃんと違って強い何かをたたえている。身長は三人の中で一番低い。それをいじると怒る。

私たちは少々夢見がちで、だけど毎日を生懸命に生きている、普通の女子高生だった。

「ねえ、何時にどこ集合？」

桜香が小さくジャンプをしながら訊いてくる。

「……桜香。明るくなったね」と乃衣ちゃん。

「へ？」

「明るい。ってか、その方が可愛い。前、怖かったよ、ちょっと。人がはね返されるかんじがした」

「可愛い？」

桜香はいつでも可愛くなりたがっていた。でも、上手く笑えなかったし、対人恐怖症気味だったから、暗い印象をもたれがちだった。しかも、桜香の好きな動物はハリネズミ、好きな植物はサボテン。「どんだけトゲ？」と乃衣ちゃんが突っ込むのも無理ない。桜香のまわりは見えない棘で覆われていた。

「うん、可愛い。……えっと、集合は……千世ちゃん、決めて」

「四時半に星空駅で。詳しいことは、またメールで」

私は、すぱっと答えた。

「流石つ。『決断の千世』だわ」

桜香が拍手をした。乃衣ちゃんも桜香も、優柔不断だったから、何かを決めたり企画するのは私の役目なのだった。

「今年は楽しくなるかな？」

「乃衣ちゃん、今年が最後よ？遊ばなきゃ」

桜香が、つややかな黒髪を結び直した。高校生にしては少々、可愛すぎるリボンゴムで飾られている。結び終わると、ため息。

「もう時間が……」

そういう桜香の目が潤んでいたように見えたのは私だけ？

「ってか、マジで時間なくない？」

私は教室の時計を見て思わず立ち上がる。五時四十二分。あと三分で最終下校時刻。夏だから空は明るい。ただ、時間を過ぎると、門を閉められてしまうので、早くしなければ。

慌ててスクバを掴むと、私たちはすごいスピードで校舎を出た。

「早っ、早いよ……。二人とも……」

ケホケホ。咳をしながら桜香が追って来た。

「セーフ」

私たち三人はニヤリと笑って顔を見合わせた。ここ数日、このギリギリ下校が私たちの日課のようになっていた。

「はあ……。こうも毎日、ダッシュはキツイよ」

「ごめんごめん。桜香、風邪？」

「え？……うつん。元気よ」

「最近、顔色が悪いよ？」

乃衣ちゃんが優しい声で訊く。恋人みたいじゃん。と、私は心の中で突っ込む。

「もともとよ。乃衣ちゃんより白いもの。……あつ、一番星」

桜香は少し暗くなり始めた空の一角を指差した。

夕暮れの赤が夜に飲まれていく、不思議な色の空に、小さな光がひとつ。

今にも消えそうなその光を見上げて。

この夏は楽しくなるだろう、と、漠然とそんなことを思った。

桜香。あなたは同じ空の同じ星を見て、ただひとり、永遠を願って

いたんだね。

この時がずっと続くように、祈っていたんだね。
そうでしょう？

第一章 星の少女（後書き）

どうでしょう？

序章から第一章への振れ幅ハンパないですが（笑）

ファンタジーから日常に、一気に来ました。

この先はずっと三人の日常になります。

ちなみに 作者・ヨリはGARNET CROWの大ファンで、
ゆりつぺたち風の人々が出てくるお話も書いてたりしますww
このお話が終わったら投稿しようかな……？

とりあえずは「星降る町の彼女」をよろしく願いします（^^）

第二章 ひだまりの声

「乃衣ちゃん、お昼、一緒に食べてもいい？」

高校生になって、最初の、午後まで授業があった日。四月のひだまりに柔らかく声が響いた。

「桜香、自分の教室で食べないの？」

「……うん。嫌だ」

桜香はうさぎ柄のランチトートを持って、教室の入り口に立っていた。

「嫌って……。しょうがないな。千世ちゃんも一緒だけど、いい？」

そう。この日が最初に桜香と言葉を交わした日。乃衣ちゃんにいわれて、私は初めて桜香の顔を見た。

はっとした。

はつきりいうと、人間味に欠ける少女だった。

桜香の目は、黒くて澄んでいて、漆黒のビー玉みたいだった。肌はガラスにミルクを薄く塗ったような白。なんというか、人形のような静かな迫力があつた。

星で作られた人形だ、と思った。

「うちは杉本千世。よろしく」

それだけをさらっといい、私は再び食事に戻った。

「うちは桜香と中三で会ったの。うちのクラスによく来てて、中一の時から知ってたんだけど、そっちは桜香のことだから忘れてて。

三年で同じクラスになって、意外と気が合った。で、桜香。千世ちゃんの中一の委員会と一緒に、それで……」

乃衣ちゃんが人見知りの桜香と私が仲良くなれるように努力していた。

「小学校は学区が違ったの？」と、私訊いてみた。ちなみに私は、
「第一だよ。……桜香は？」

「私……私立で。ずっとこの町だったけど」
「ほうほう」

私はふざけた返答をしてしまった。この子と気が合う、と感じたから。失礼だったかも……。

だけど、そんな心配いらなくて。

今では二人で出かけたりもしているくらい。

「いいな、千世ちゃん。私もパーマとかカラーとかしてみたい」

私と桜香の出会いから一週間。桜香が私の髪をじっと見ていった。

「染めないの？」

「親がダメっていうのよ。まったく……」

そういつて顔を歪ませる桜香は、恐いけれど可愛かった。

「私、大学に入ったら、ぜったいに茶髪にして、メイクめっちゃめっちゃ濃くするから」

私はふつとため息。

「いいよね、桜香は。大学には入れるっていう前提があつて」

「え？」

「うちなんて大学入れないよ……」

「いやいやいや、千世ちゃんは大丈夫でしょ。私のがダメだよ」

「まあまあ」

乃衣ちゃんがいうけれど、

「乃衣ちゃんは頭いいからよ」

「人の気も知らないで」

桜香と私からの集中砲火を浴びる。

「ってか、この世の中、大学に入っても仕事が見つからないわよね」
桜香がなぜか笑顔でいった。

「あなたたち、暗いわよ」

「先生っ」

私と乃衣ちゃんのクラスの担任である高野先生が立っていた。私たちはびっくりして声をあげた。

「木梨さん、石原先生戻ってるんじゃない？」

「うそっ、ヤバっ。ありがとうございます。じゃあね、乃衣ちゃん、千世ちゃんっ」

桜香の担任の石原先生は、めんどくさいおばさんで、桜香は嫌われないように必死だった。思えば彼女は、いつも人に嫌われないように生きていた。

「あわただしいわね」

高野先生の言葉に乃衣ちゃんが笑った。

桜香が走るとポテポテと音がしそうで、面白かった。

「桜香、帰りは？」

私が訊くと、

「一緒に帰るーっ」

と叫ぶような答えが帰って来た。

この頃は楽しかったね、桜香。
今も楽しくやってる？

第二章 ひだまりの声（後書き）

第二章終わり♪

千世ちゃんは私・ヨリの友達がモデルだったり（笑）

ところで。

GARNET CROWの話でもしますか…。

↑

「恋することしか出来ないみたいに」のPVのゆりっぺとAZUKIさんが可愛すぎる！！！！

屋上でAZUKIさんがゆりっぺをどーんってするとこ、発狂ものです。

可愛すぎて死ぬかと思ったww

YouTubeでたまたま見つけたの♪

では。

ばいきゅ〜（*^o^*）ノ

第三章 虹を渡る

「虹のふもとは一生立てないよね。だって、こっちが動く toward うも動く」

ある時、桜香がぼつりといった。彼女はときたま、こういった詩的な言葉を生み出した。

そんな虹の出た夏の日。その日は夏休み前日で、高校最初の夏休みを目前にした私はテンションのメーターが振り切ってしまった。

「きやほほっ。ね、どこ行くっ？」

「ふふっ、千世ちゃん、変よ？」

桜香がきゅっとなんげした。

私たちはその日、じつくりと話合って海へ行くことを決めた。

「嫌だな……。私、泳ぐのだけはダメなんだよ」と乃衣ちゃん。

「じゃあ、泳がなくなっちゃいいよ。……楽しいのにな」

「私、水着やだ。浜辺散策にしよう」と桜香。

「えー？じゃあ、誰も海入らないの？ひどいよ。桜香、泳げるでしょ？」

「でも、やだ」

「乃衣ちゃんの味方するんだね。じゃあ、いいよ、泳ぐのなしね」

私は、なぜか泳ぐのは嫌いじゃなかった。むしろ好きだった。普段の運動に関しては、桜香ほどではないにしても苦手なのだが、水泳は好きだった。重力を感じないで浮き、ただ流れに同化することはとても気持ちよくて、水の中にいる時だけは本当の自分になれる気がする。

しかし、私の友人たちは、その気持ちがかけらもわからないようだ。

「見えたよっ」

バスの窓から見えたキラキラと反射を繰り返す海。私は潮の香りを

大きく吸い込み、後ろの席を振り向いた。

「千世ちゃん」

乃衣ちゃんが小声でいった。彼女にもたれるようにして桜香が眠っていた。

私たちはとなりの市の海へ来ていた。電車で着いた駅から、海へ直通のバスへ乗ったのだが、バスで座つてすぐに桜香が酔つたといひ出したのだ。

もともと乗り物が苦手な桜香は、何に乗っても酔うのだが、バスに乗らないと海へは着かないのだから仕方ない。乃衣ちゃんが持っていたレモンティーを飲ませ、「寝てなよ」といった。桜香はめずらしく素直に従つた。

そして、いよいよ海が近づいた時になって、桜香は眠りに落ちたらしい。

バス停へ着き、私や乃衣ちゃんが立ち上がったたりバッグを持ったりしていると、桜香が起きた。

「……着いた？」

「着いたよ」

私は桜香のバスケットを持ってやりながら答えた。

「気分はどう？」

乃衣ちゃんが訊く。

「大丈夫」

私たちは比較的空いている浜のパラソルの下にシートを広げた。

太陽は強く照りつけていて、風もカラッとしていて、海日和だった。そこそこ綺麗な海岸だったので、人も多かった。

「サンドイッチ、食べる？」

桜香はバスケットを開けた。

「おおっ、すごい」

私は思わず声をあげた。

見栄えのいい白の間に鮮やかな緑やピンクや黄色。やっぱり食べ物

は見た目が大事である。桜香の料理を我が母にも見せてやりたいものだ。

少し早めの昼食を済ませた私たちは、荷物を海の家にあったコインロッカーに預けると、浜を歩いてみることにした。

「歩きにくいね」

「はだしになる？」

「そうしょっか」

サンダルを手に持って、私たちは砂の上を歩いた。ゆっくり。でも、決して止まることなく。その間にも太陽はジリジリと私たちの白い肌を焦がし続けていた。

桜香の体調が心配だったが、学校にいる時よりも元氣なくらいで、時折笑い出したり駆け出したりしていた。「子犬みたいだね」と乃衣ちゃん。

乃衣ちゃんはアメリカの国旗みたいなＴシャツにデニムのショートパンツを着ていて、海をバックにすると、パッと目を引いた。私はキャラクター物のＴシャツと青い小花柄のミニスカート。

桜香は白いレースのトップスと黒いキュロット。レースと一緒に桜香も透けてしまいそうだった。

「桜香、日焼けしちゃうよ？今日はいいの？」

「日焼け止め、塗りまくったもの。大丈夫なはず。千世ちゃんこそ、色白美女なに」

「何それ？まあ、こちらは生まれつき色白だもんね。乃衣ちゃんと違って」

私は桜香と顔を見合わせてクスクス笑った。乃衣ちゃんは、普通の肌色なのだが、私と桜香が病人並みに白かったため、三人でいると一人だけ黒く見えた。だから私と桜香は乃衣ちゃんをいじるネタとして、よくそれを持ち出した。

平和だったんだな、とつくづく思う。

しばらく歩くと、人気のない岩場へ来た。テトラポットへ移り、私たちは腰を下ろした。

潮風がそよそよと吹いていた。

「この海の間こうには何があるのかな」

乃衣ちゃんがふといった。

「千葉にぶつかるんじゃない？」

私は即答した。

「うわっ、冷淡ーっ」

乃衣ちゃんが顔を歪ませた。

「ずっと向こうの見たことのない世界が……とかいってほしかった」

「似合わねーっ」

私は早口でいった。……でも。

「いつか三人で行こうよ。海の間こうに。うち、世界を見たい」

「世界一周、とか？」と乃衣ちゃん。

「私……日本でいいよ」

桜香がぼつりといった。

「なんでっ？」

思わず私は声を荒げた。

「私ね、乃衣ちゃんと千世ちゃんがいてくれたら、どこだっていい

の」

どこだっていい。乃衣ちゃんと私さえいれば。

それは桜香の本心から出た言葉だった。ひとつだけの願いだったのだ。

「ただ……」桜香は空中をすつと手でなぞりながらいう。「向こう側に何かがあるなら行きたい。虹を渡るみたいにして、海の上を越えて、どこかへ着いたら……」

何があるのだろうか？

私たちには、よくわからないのだ。

だから、夢をみる。まだ見ぬ「いつか」に期待する。

突然、乃衣ちゃんが立ち上がった。

「ラムネでも飲んで帰ろうか？」

「うん」

私たちは来た時と同じように、ゆっくりと歩いて海の家まで戻った。ラムネを飲んで、私は手をベタベタにして、二人に笑われた。いうまでもなく、開けることに失敗したのだ。

帰りのバスに乗ると、桜香は出発するより前に眠ってしまった。私と乃衣ちゃんも競争するかのように目を閉じていた。

まだわからない。

私、決めてたよ。いつか向こう側をすべて見て、何があるのかを見てやるって。

だから今はまだわからない。それでいいんだ。そう思っていた。

第三章 虹を渡る（後書き）

三章おしまい！

ぐだぐだかな？

事件が起きないからつまらないのか（□、；）！！

でも、メイン三人とも私は好きです。

ピュアすぎないイイコってかんじがして。

みなさんは誰推しですか？？（笑）

気を取り直して。

いつものGARNETトークに。↑

ゆりつぺが3rdアルバム「Crystalize」君という光
「で一番好きなのは「Marionette Fantasia」
だそうです。

私もだよ！気が合う！

一人でガッツポーズです。

このアルバムは暗めの曲が多くてGARNET CROWらしいと
思うのですが…。

Marionetteのダークでメルヘンなかんじとか、あの変
拍子がツボです♪

今日はこの辺で…

ばいきゅー (* ^ O ^ *) /

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4293ba/>

星降る町の彼女

2012年1月13日16時48分発行